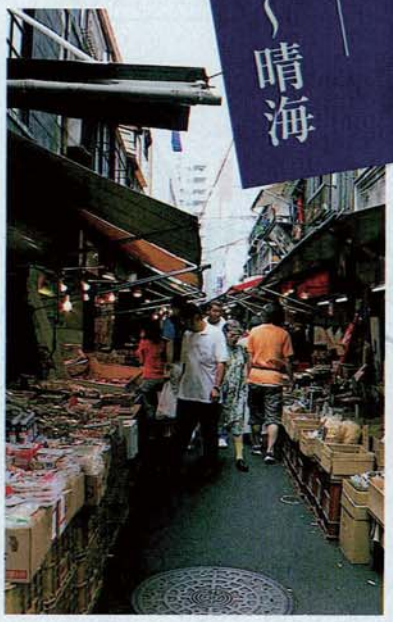
街散歩（まちさんぽ）

築地～晴海

佃小橋から

時間（とき）の流れを感じて――
築地～晴海

「築地」の名前の由来になったほど、築地～晴海一帯は、埋め立ての歴史と切っても切り離せない。それは同時に、“渡し”の歴史でもある。今回は、海を埋め立て、そこに住んだ人々が生きた時間（とき）を探しに行く。



築地場外市場

築地場外市場

関東大震災後、中央卸売市場の附属商らが露店やバラックで店を出し、場外の市場として安い値で物を売る店が集中したのが始まり。上野のアメ横と並ぶ都内有数の食品・調理用品問屋街である。お隣りの中央市場同様、朝早くから活気に満ちた人々の声がこだまする。

築地本願寺

京都の浄土真宗西本願寺別院。17世紀初頭、西本願寺の僧・准如が橘町（現在の東日本橋3丁目）に創建したが、1657年の明暦の大火により焼失。幕府から、海だった現在の場所が与えられ、埋め立てて再建した。現在の本堂は、関東大震災で焼失後、東京帝国大学の伊藤忠太博士が設計し、1935年に完成した。

晴海客船ターミナル

1991年5月、東京港にオープン。内外航を含めた客船入港実績は、日本一を誇る。レインボーブリッジやお台場など、東京ベイエリアを見渡すことができ、隣接する晴海埠頭公園と共に、夜景のベストスポットとして有名。

石川島灯台跡

石川島は、江戸時代に人足寄場が置かれたことで有名。その人足寄場の西岸に、江戸(東京)湾から日本橋方面に入る船にその位置を知らせるため、1866年灯台が造られた。当時の姿を模したこの建物は、現在、公衆トイレとして利用されている。

佃島界隈

佃島は、徳川家康が摂津国(大阪府)佃村の漁師を呼び寄せ、白魚漁の特権を与えたことに始まる漁師町。佃煮の発祥地としても有名。江戸時代から続く佃煮屋の老舗が、今でも3軒残っている。

晴海アイランド トリトンスクエア

今年4月、晴海にオープンした話題のスポット。超高層オフィスタワーや60の店舗を持つ商業施設、花・緑・水のテラスなどがあり、新たな憩いの場となっている。

「築地」といえば、やはり"市場"。しかも、市場の朝は早い。というわけで、今回はいつもより少し早起きをして出かけることにした。築地駅を出ると、まだ8時前だというのに、人や自転車、車の多さに驚かされる。これがオフィス街だったら、まだ人影もまばらな頃だ。もちろん、市場といっても、場内に自由に出入りはできないので、一般客同様、場外市場の方へ行く。人と人がすれ違うのがやっとという細い路地に、所狭しと商品が並んでいる。目に付くのは、やはり海産物。素人目にも、一目で生きがいいのが分かる。市場という所は、ただブラブラと歩いているだけでも楽しくなってくるから不思議だ。なかでも、商売人同士の交わす挨拶は、会話のテンポが実に小気味よく、心に響く。

市場を後にして、お隣りの築地本願寺へ立ち寄る。コンクリート造りの古代インド石造寺院様式を取り入れた大伽藍の偉容が、ひときわ目を引く。お参りを済ませ、今度は新大橋通りから明石町を抜け、佃大橋へ。この橋が昭和39年に竣工するまで、ここには佃の渡しがあり、約300年もの間、人々の往来を助けたという。

橋を渡ると、漁師町の面影が残る佃島である。ここは、戦災の被害を免れたため、今でも古い街並みが残る。狭い路地、木造住宅、軒先に並んだ植木鉢、ご近所との世間話など、下町情緒がそこかしこに感じられる。しかし、ふと見上げると、川向こうには近代的な高層マンション群。造船工場の跡地を開発して造られたものだが、佃島の情景とあいまって、なんとも言えない独特のコントラストを作り出す。できることなら、これ以上、この地が変わらずにいてほしい——そんなことを、地元の人々の信仰が厚い住吉神社に願い、佃島を後にした。

月島を抜け、今度は晴海を目指す。朝潮運河を渡ってやって来たのは「晴海トリトンスクエア」。今年4月にオープンしたばかりの一大タウンだ。緑あふれるテラスで一休みした後は、夕暮れの倉庫街を横目に見ながら、最終目的地・晴海埠頭へ。夕日が沈むと、少しずつ暗闇が迫り、ベイエリアに灯がともる。そんな何気ない時間の流れを感じる時、私は、この上ない幸福を手に入れる。

参考文献:「中央区三十年史」(東京都中央区役所)

※番外編——軒先の井戸

佃の民家の軒先に残る井戸。懐かしい…。